チャルチュアパ遺跡タスマル地区出土石彫から見た ヒトの移動

伊　藤　伸　幸

1．はじめに

チャルチュアパ遺跡では、オルメカ、マヤ、トルテカなどといった石彫様式がみられ、土器にも他の地域の特徴がみられる（図１）。一方、チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ、カサ・ブランカ、タスマルの各地区では、20mを超える高い建造物があり、合計すると30基以上の記念碑的な石彫が出土している。

チャルチュアパ遺跡では、メキシコ湾岸地方のオルメカ文化の特徴がみられるが、当該地方のオルメカ文化を担った人々が勢力を延ばしたと確認できるような痕跡はない。しかし、チャルチュアパの人々が、直接もしくは間接的に交流を持ち、何らかの政治組織を通して、先進技術をチャルチュアパに導入した可能性がある。そうした先進技術には、石彫製作技術もあった。一方、チャルチュアパではマヤの初期文化と考えられる要素もみられる。また、メソアメリカにおける初期の文字文化が先古典期後期に始まったことも示している。チャルチュアパではマヤ文化の先進技術や文化要素を取り入れていた（伊藤 2011；Ito, 2009）。そして、思想、信仰、暦も取り入れていた。チャルチュアパ遺跡では、先古典期前期の石彫はないが、先古典期中期には石彫が出現する。この時期に相当する石彫は、エル・トラピチェ地区で出土した７号記念物、ラス・ビクトリアス地区で見つかった12号記念物、そして、カサ・ブランカ地区でみつかった座像が相当する。しかし、７号記念物のみが、原位置で、先古典期中期のE3‒1建造物の建築材として使われた石の間から出土した（Sharer, 1978）。ほかの石彫２基はその特徴がオルメカ様式に相当し、先古典期中期として考えられる。この時期に、チャルチュアパはこの地域の中心的な存在となり、石彫を通して、ある信仰体系が出来上がりつつあったと考えられる。

先古典期後期に属する１、２、３、10号記念物がエル・トラピチェ地区 E3‒1建造物の前から出土した（Sharer, 1978）。また、同じ地点から１対の様式化されたジャガー頭部石彫が E3‒1建造物の階段前から出土した（Ito, ed., 2014; 伊藤 2016）。カサ・ブランカ地区では５号（C3‒6）建造物の前で素面の石碑と祭壇が小型の様式されたジャガー頭部石彫とともに出土した（Ichikawa, 2007）。２号建造物（C3‒3）の前では、石彫２が出土した（Ohi, 2000）。その他、チャルチュアパ遺跡では出土状況が不明な石彫数基が出土している。

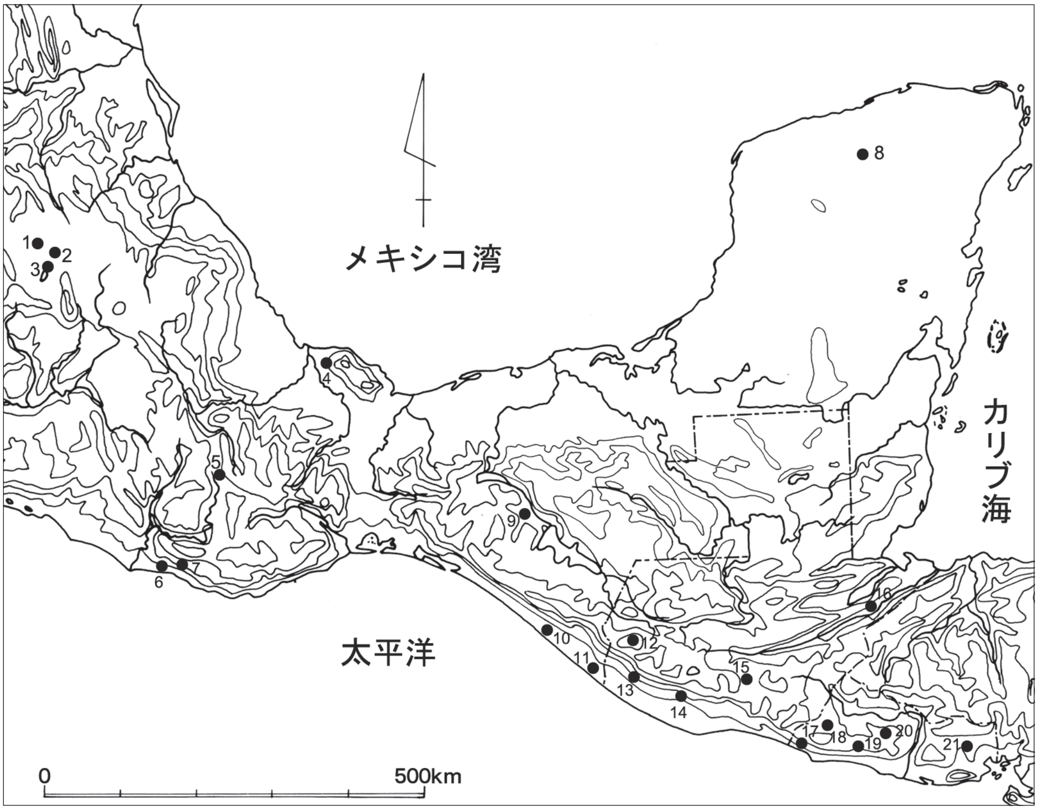


図1 メソアメリカにおいてタスマルと関連する遺物が出土した遺跡

1. トゥーラ、2. テオティワカン、3. テノチティトラン、4. トレス・サポテス、5. モンテ・アルバン、6. リオ・グランデ、7. ノパラ、8. チチェン・イッツァ、9. チアパ・デ・コルソ、10. リオ・アリバ、11. イサパ、12. タフムルコ、13. タカリク・アバフ、14. エル・バウル、15. カミナルフユ、16. キリグァ、17. カラ・スシア、18. タスマル、19. サン・アンドレス、20. シワタン、21. ケレパ

一方、タスマル地区では先古典期後期と考えられる石彫や出土状況から古典期前期とされる石彫もある。また、トルテカ文化の特徴を持つ石彫やメキシコ湾岸地方のトトナカ文化に属する石彫もある。タスマル地区では、様式化されたジャガー頭部、石碑、チャクモールなどのほかに小型石彫も出土している。小型石彫には、ユーゴ、儀礼用石斧、香炉などが含まれる。

以下では、最初にタスマル地区で出土した石彫について考察する。そして、タスマル地区の石彫が持つ特徴から、タスマル地区を中心としたヒトの移動について考える。

2．タスマル地区で出土した石彫

(1) 記念碑的石彫

タスマル地区で出土した石彫は、科学的調査から発掘した記念物のみではなく、既にタスマ

表１　チャルチュアパ遺跡タスマル地区の記念碑的石彫

No	石　彫	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	出土した場所	時　期	図　版	備　考
1	21号記念物	263	104	44	B1–1建造物		写真１	“タスマルの乙女”
2	22号記念物	66	25	39	B1–1建造物南側		写真３a	右半分の破片
3	23号記念物	97	97	41	不明		写真２a	チャクモール
4	24号記念物	64	107	28	不明		写真２b	チャクモール
5	25号記念物	72	124	41	不明		写真２c	屈んだ動物
6	26号記念物	36.5	26.5	17	不明			Anderson, 1978, fig. 14a
7	27号記念物	98	44	43	B1–4建造物の北		写真３b	人物？
8	29号記念物	44	38	10	B1–4建造物西端			Anderson, 1978, fig. 14b
9	ボッグスが発掘した石彫	53.5	92	20	1b 建造物の西壁		写真５b，６c	階段の東側

ル農園とカサ・ブランカ農園に保管されていた石彫もあった（表１）。アンダーソンの報告によれば、記念物８基があった（Anderson, 1978)。これらの石彫以外に、ボッグスの調査で出土した石彫１基がある（ADAM: Archivo del Dirección de Arqueología del Ministerio de Cultura, HOLLIS: Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Photographic Archives)。

１）21号記念物：“タスマルの乙女”とされる人物形象石碑

B1–1建造物の西側表土でみつかった（図２a、写真１）。粒子が細かな安山岩に浅浮彫りが施されていた。この石彫の時期を決定することができないが、古典期終末期若しくは後古典期前期とされる（Anderson, 1978)。また、この石彫は、劣化している。性別は不明であるが、幾何学文で飾られた杖は腕をＬ字に曲げて右手で持ち、そして、頭飾りと幅広の首飾りで着飾っている。この石碑の両側面には文字若しくは擬似文字が彫られていた。

２）22号記念物：様式化されたジャガー頭部石彫

粒子の粗い安山岩でつくられている（写真３a)。アンダーソンは、時期については不明としているが、古典期終末期若しくは後古典期前期と考えている（Anderson, 1978)。また、アンダーソンは B1–4建造物出土と記しているが、ボッグスが残した発掘時の写真によると B1–1建造物の南側で出土したと考えられる（ADAM)。この石彫下部には円盤状のホゾ若しくは杭状の低い突起がある。また、ほかの同形石彫と同様に顔の中央のトサカ状突起を持っているが、上部はやや幅広になっている。他の同形石彫と表現が少し異なっている。

３）23号記念物：チャクモール石彫

タスマル地区で出土したと考えられる（写真２a)。赤―灰色の火成岩で作られている。アンダーソンは後古典期前期と考えている（Anderson, 1978)。ブロック状の石に浅浮彫りを施した石彫である。左を向く頭部を持ち、背をつけて横たわっている典型的なチャクモールである。腹部には台状部分があり、両手で支えている。両手は５本の指が表現されている。

４）24号記念物：チャクモール石彫

タスマル地区出土と報告されている。灰色の火成岩である（写真 2 b）。この石彫は、頭部を欠き、劣化が進んでいる。手には指の表現がなく、手袋のように一体化している。左肩に穿孔部分がある。アンダーソンは後古典期前期の動物形象石彫の可能性を考えている（Anderson, 1978）。

５）25号記念物：動物形象石彫

タスマル地区で出土した（写真 2 c）。アンダーソンは後古典期前期の動物形象石彫としている（Anderson, 1978）。ブロック状の石に 4 足を曲げて、屈んだ動物を浅浮き彫りしている。

６）26号記念物：人物頭部

小型の石彫頭部が出土した。粒子の細かい安山岩である。顔は 3 つのくぼみと 2 つの線で表現している。頭部にはヘルメット状頭飾りを着けていた可能性がある。アンダーソンはこの石彫が属する時期を示していない（Anderson, 1978, fig. 14a）。

７）27号記念物：人物頭部

1969年、タスマル地区 B1–4建造物（球戯場）の北側で出土した。中ぐらいの粒子を持つ安山岩でつくられていた（写真 3 b）。アンダーソンは時期を特定していない（Anderson, 1978）。頭部は、 3 つのくぼみで両目と口を、他は浅浮彫りで表現されている。左耳は楕円形で、頭部にはヘルメット状頭飾りを表現していると考えられる。眉間は 2 つに割れている。頭部下の部分は、手が加えられていないようである。

８）29号記念物：建築装飾

タスマル地区 B1–4建造物の西端で出土したとされる。灰色の火成岩である。ローマ数字のⅡの形をしている。いくつかの面が整形してあった。アンダーソンは時期を特定できないとしているが、古典期後期若しくは後古典期前期の可能性を提示している（Anderson, 1978, fig. 14b）。

９）ボッグスによって発掘された石彫

1 b 建造物の西側から出土した（ADAM; HOLLIS）。灰色の火成岩である（写真 5 b）。内向きの渦巻きを 2 つ合わせた形に、ブロック状の石を整形している。アンダーソンはこの石彫を報告していない（Anderson, 1978）。

（2）小型石彫

タスマル地区では2004～2014年の名古屋大学とエルサルバドル共和国文化庁考古課の調査によって、小型石彫や記念碑的石彫の破片が出土した（表 2 ）。一方、ボッグスの考古学調査によってもさまざまな小型石彫が出土した（表 3 ）。以下、名古屋大学等の調査とボッグスの調査に分けて説明する。

表２　名古屋大学調査（2004–2008、2010–2014）で出土した石彫

No	石　彫	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	発掘区	登録番号	図　版	備　考
1	小型石彫	7	2	4.5	P. 2, Ext. E. 3	E–1	写真４a	Bench-Figure 石彫破片
2	小型石彫？	6.5	2.9	1.1	P. 29	E–27	写真４b	線刻された礫
3	小型石彫？	6	3.6	5.2	P. 2, Ext. 4	E–1	写真４c	２つの穴
4	小型石彫	7	7	5.5	P. 26, S–1	E–10	写真４d	幾何学文の浮彫り
5	円筒形に整形された石	8	6	4.5	P. 10	E–3	写真４e	破片
6	円筒形に整形された石	9	7.5	7.5	P. 26	E–6	写真４f	破片
7	記念碑的石彫の破片？	33.5	13	10	Tr. 23, Ext. S. 3	E–27	写真４g	シルエット石彫破片？
11	軽石製品（台形状）	24	22	8.5	P. 2, Ext. E. 4	E–17	写真５c	側面に２段が表現？
12	軽石製品（三角形）	26.5	16	8	P. 2, Ext. S.E.	E–8	写真５d	赤色
13	軽石製品（ドーナツ状）	16.5	16	7.5	P. 2, Ext. E. 4	E–6	写真５e	建築装飾？

表３　ボックスが発掘した石彫とシュークの集成にある石彫

No	石　彫	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土した場所	時　期	図　版	備　考
1	香炉	19	22.5	30	14b 埋葬		写真５a, ６d	くぼみ部分に炭化物と灰があった。
2	ユーゴ形石彫	42.1	35	10	２号墓(22c 埋葬)	古典期後期	—	完形、Shook y Marquis, 1996, Y3
3	ユーゴ形石彫	41	33	10	21埋葬		写真７d	破片、Shook y Marquis, 1996, Y2
4	儀礼用石斧	26.5	21	3	２号墓(22c 埋葬)	古典期後期	写真７a, b	完形、Shook y Marquis, 1996, U42
5	儀礼用石斧	29	21	3.25	２号墓(22c 埋葬)	古典期後期	写真７a, c	完形、Shook y Marquis, 1996, S3
6	儀礼用石斧	30	21.5	3.2	２号墓(22c 埋葬)	古典期後期		完形、Shook y Marquis, 1996, SK8
7	儀礼用石斧	29	22.5	3.5	21埋葬			猛禽類の浮彫り、Shook y Marquis, 1996, BP5
8	キノコ石	26	—	—	８号墓		写真７e	
9	動物形象石皿	—	—	—	３号墓		写真７f	
10	人物頭部	16.5	14.5	11	不明		写真７h	
11	人物頭部	—	—	—	不明		写真７g	
12	儀礼用石斧	22	18.5	3.5	不明			人物、Shook y Marquis, 1996, H5
13	儀礼用石斧	25	20.4	—	不明			ガイコツ、Shook y Marquis, 1996, SK11
14	パルマ形石彫	23	15	14.5	不明			動物、Shook y Marquis, 1996, PALMA1

＊発掘等に関する情報は、文化省自然文化遺産局考古部保管資料（ADAM）とピーボディ考古学民俗学博物館蔵写真資料（HOLLIS）から得たものである。

１）2004～2014年の調査によって出土した小型石彫

建築用装飾、Bench-Figure 型石彫などがある。また、記念碑的石彫に属する可能性がある破片４点（fig. 5d, e, f, y g）が出土した。

a．ベンチに座った人物石彫（Bench-Figure 型石彫）破片

B1–4建造物（球戯場）の表土から出土した（写真 4 a)。

b．幾何学文が彫られた石彫破片

両端が欠けた石彫破片である（写真 4 d)。

c．円筒形に整形された石彫破片

大きさと形から記念碑的石彫の可能性がある破片（写真 4 e）と、どのような石彫か不明な破片（写真 4 f）がある。

d．記念碑的な石彫の破片

三角形に整形しており、一端から先が欠けている（写真 4 g)。

e．人物頭部？

1 点は楕円形で、線刻が施され、 2 本の線が 1 本の長い線と交差している（写真 4 b)。もう 1 点は自然石に二つの穴が開いている（写真 4 c)。どちらも、人物の頭部を表現している可能性がある。

f．軽石製品

軽石に細工がしてある石製品が数点出土している（写真 5 c, d, e)。三角形、台形、方形、ドーナツ形のものがある。屋根飾り若しくは建築装飾の可能性がある。また、ボッグスの調査でも同様に幾何学文が浮彫りされた石製品が出土している（写真 5 f)。

2 ）ボッグスが発掘した小型石彫とシュークが報告している小型石彫

ボッグスの発掘調査時に撮った写真と記録に、小型石彫がみられる（Boggs, 1945; ADAM; HOLLIS)。また、シュークらが球戯に関連する 3 種の小型石彫（ユーゴ・儀礼用石斧・パルマ）を集成している。その中にタスマル地区出土の小型石彫が含まれている（Shook and Marquis, 1996)。

a．香炉（写真 5 a）

古典期前期の14b 埋葬の人骨の南で石製香炉 1 点が出土した。方形の石に浮彫りが施されている。また、剥落性顔料（白、赤、黄、青）が施されていた。上面のくぼみには炭化物と灰が残っていた（ADAM)。

b．ユーゴ形小型石彫

ボッグスの記録によると、21号埋葬で壊れたユーゴ形小型石彫 1 点が出土した。灰色の火成岩で磨かれていた（ADAM)。もう 1 点は古典期後期の 2 号墓（22号埋葬）で他の儀礼用石斧 2 点と共に出土した（Shook and Marquis, 1996, Y2)。

c．儀礼用石斧

1b-sub 建造物にある 2 号墓から 3 点の儀礼用石斧が出土した（写真 7 a, b, c, d；Shook and Marquis, 1996, S3, SK8, U42)。21号埋葬からはユーゴと共に 1 点の儀礼用石斧が出土した（Shook and Marquis, 1996, BP5)。合計 4 点出土している。

d．キノコ石

8号墓で出土した3脚付キノコ石1点である。古典期前期とされる（写真7e；HOLLIS）。

e．動物形象石皿

4脚付。1b建造物の西側の3号墓から1点出土した（写真7f；HOLLIS）。

f．人物頭部

1点はB1−1建造物から出土した（写真7g；HOLLIS）。もう1点は、B1−1建造物から出土し、灰色をしており、赤色顔料がついていた。正確な出土位置は不明である（写真7h；ADAM）。

g．パルマ形小型石彫

シュークらがタスマル地区から1点出土したと報告している（Shook and Marquis, 1996, PALMA1）。

3．タスマル地区とその周辺の石碑

タスマル地区で出土した人物形象石碑（21号記念物）は、エルサルバドルで唯一の事例である（図2a）。チャルチュアパ遺跡21号記念物は、タスマル地区から現在展示されている国立博物館に移された。バルベレナによれば、B1−1建造物の西側にあったとされる（Barberena, 1910）。ラルデは、もともとピラミッド頂部にあり、後に西側の平らな面まで転げ落ちたと考えた（Larde, 1926）。21号記念物がエルサルバドルの首都サン・サルバドルに移される経緯について、バルベレナは、「当初、マウンドのある土地の地主であるN. イダルゴ夫人がチャルチュアパ病院に寄付した。そして、当該院の委員会で応分の報酬を政府に求めて、石彫を首都に運んだ。」（拙訳）と述べている。また、バルベレナは、21記念物が出土したピラミッドを“タスマルの母”、21号記念物は“タスマルの女王若しくは乙女”と呼ばれていたとし、高浮彫りで豪華に着飾り杖若しくは花の枝を持っている女神を表していると考えている（Barberena, 1910）。一方、ペッコリーニは、21記念物の手に持つものを先住民の楽器“Ayacatl”と考えている（Peccorini, 1913）。ラルデは右手に持つものを上部が尖っていることから尖頭器とし槍と考えた（Larde, 1926）。ラルデ・イ・ラリンは、タクーバの最後の首長が持っていた儀礼用杖にサルとヘビの表現があったことと、この物体に同じ動物が表現されていたことで儀礼用杖と考えている（Larde y Larín, 1959）。

頭飾りについては、多くの研究者はトラロック神と考えている（Girard, 1949; Longyear, 1966; Baudez, 1970）。一方、ラルデはサルを、ヘミングはシペ神を、ラルデ・イ・ラリンはケツアルコアトル神を、シュラーはシペトテク神を表現していると考えている（Larde, 1926; Henning, 1918; Larde y Larín, 1959; Shuler, 1925）。

21号記念物の側面にある文字について、スピンデンはマヤ古典期の石碑とは異なることを

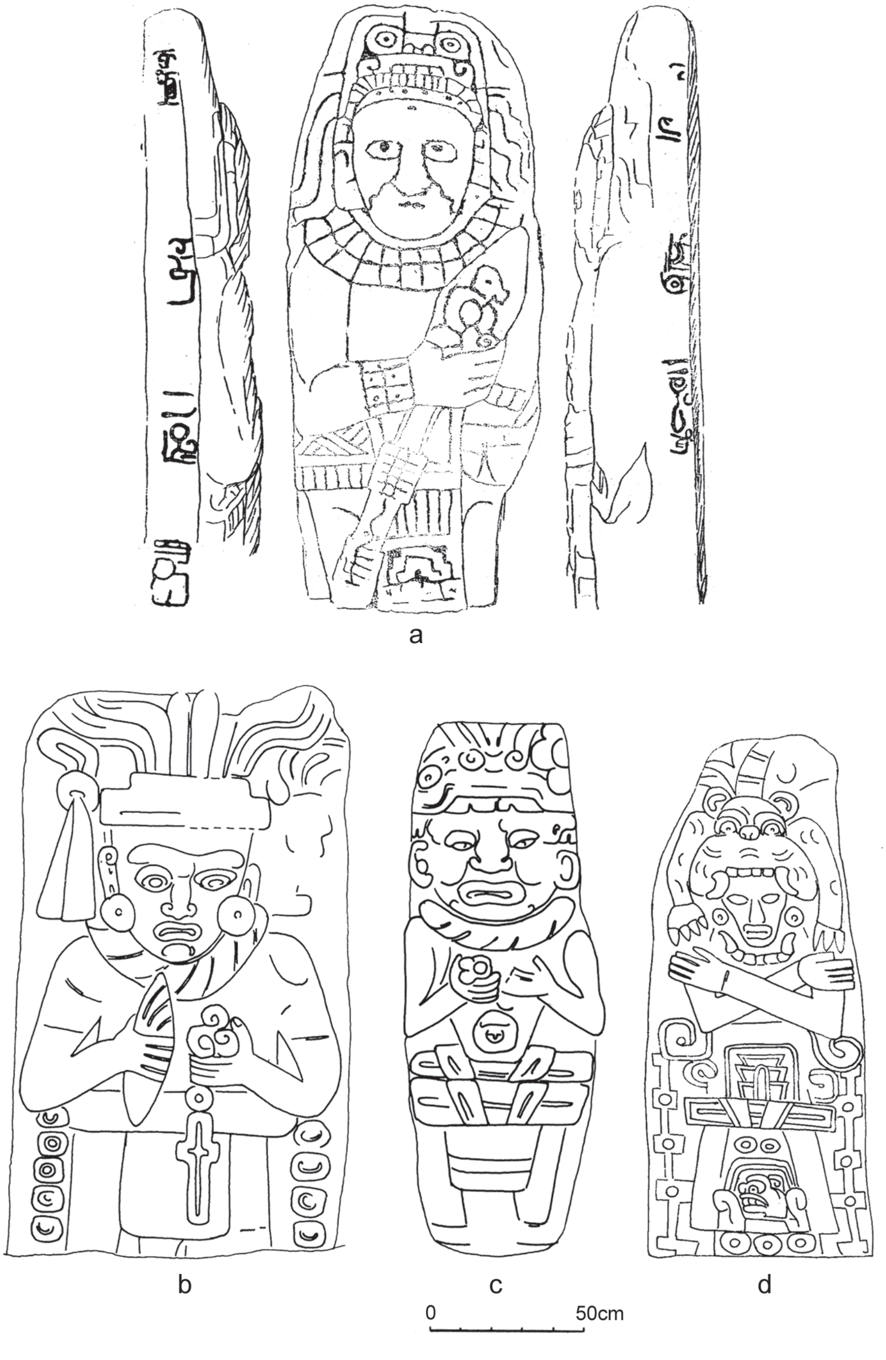


図 2　タスマル遺跡とリオ・グランデ遺跡の石碑

a. チャルチュアパ遺跡21号記念物、b. ノパラ遺跡 1 号石碑、c. 同遺跡 2 号石碑、
d. リオ・グランデ遺跡 1 号石碑（a. Larde y Larín, 1959; b, c, d. Jorrín, 1974）

指摘している（Spinden, 1915）。ラルデはポコマン語であると考えている（Larde, 1926）。ヒラルドは非常に幼稚で古典期マヤのものと大きく異なっているとしている（Girard, 1949）。ゴンサレス・ソルは、文字については言及しておらず、ただ、正面しか彫刻しておらず、正当なマヤの石碑とは異なるとしている（González Sol, 1951）。しかし、ラルデ・イ・ラリンは、サルとヘビの頭部は認識できるが、文字は様式化しており、最終的な判断は難しいとしている（Larde y Larín, 1959）。現時点では、マヤ文字などのメソアメリカの文字に似ているところはないため、この“文字”を解読することは難しい。

ところで、オアハカ地方太平洋岸では、タスマル遺跡の石碑に似ている石彫がある。ナバレテは、リオ・グランデ遺跡とエル・バウル遺跡の石碑が類似しており、同時期と考えている（図 2 b, c, d；Navarrete, 1979; Jorrín, 1974）。ホリンは、リオ・グランデ遺跡 2 号石碑はモンテ・アルバンの石彫に似ており、土器資料も考慮に入れて、モンテ・アルバン遺跡に起源があると指摘している（Jorrín, 1974）。タスマルの石碑の時期について、ロングイヤーはメキシコの影響から後古典期と考えている（Longyear, 1966）。ボーデは、この石碑を IV 期（紀元後950–1200年）としている（Baudez, 1970）。

メキシコ中央部のトゥーラ遺跡では豪華な頭飾りをしている人物を表現した 2 号石碑がある（Fuente de la, et al., 1988, No. 99）。この頭飾りは、典型的な環状の目を持ちその頭に羽根が垂れているトラロック神の仮面である。また、トゥーラ遺跡には、他にも同様な石彫がみられる。デ・ラ・フエンテらは、顔の周りに蛇が表現された男性が表現された石彫を報告している（Fuente de la, et al., 1988, No. 7）。足の下の部分を欠いているが、大きさは137（高）×37.5（幅）×24（厚）cm である。腕の部分は確認できないが、開けた大きな口に人物の顔が表現されたヘビの頭部が表現されている。ヘビは円盤を中央に持つ丸い目を持っている。背部には、“ 1 のアシ”の文字が確認できる。

文字に関しては、リオ・グランデ遺跡 1 号石碑には、人物の両足の間に 1 文字が表現されている（図 2 d）。この文字はトゥーラ遺跡の文字に似ている。しかし、タスマル遺跡の石碑（21号記念物）には、類似性が見られない。これは、タスマル遺跡においては、この時期の土器にも例があるように文字に似た文様を彫っただけなのかもしれない。従って、どのような経路をとってこれらの文字文化がタスマル遺跡に伝わったのかを考える必要がある。

4．エルサルバドルとメソアメリカのチャクモール

中央アメリカでチャクモールは、タスマル地区、キリグァ遺跡とコスタリカ共和国にみられる（図 3 c, e；Richardson, 1940）。一方、チャルチュアパ遺跡タスマル地区にあるチャクモールは23号記念物と24号記念物の 2 基であるが、バルベレナの報告によれば、他の 2 基の石彫とともに、コーヒー農園にあった。“タスマルの乙女”よりは小さく、ソファのようで、

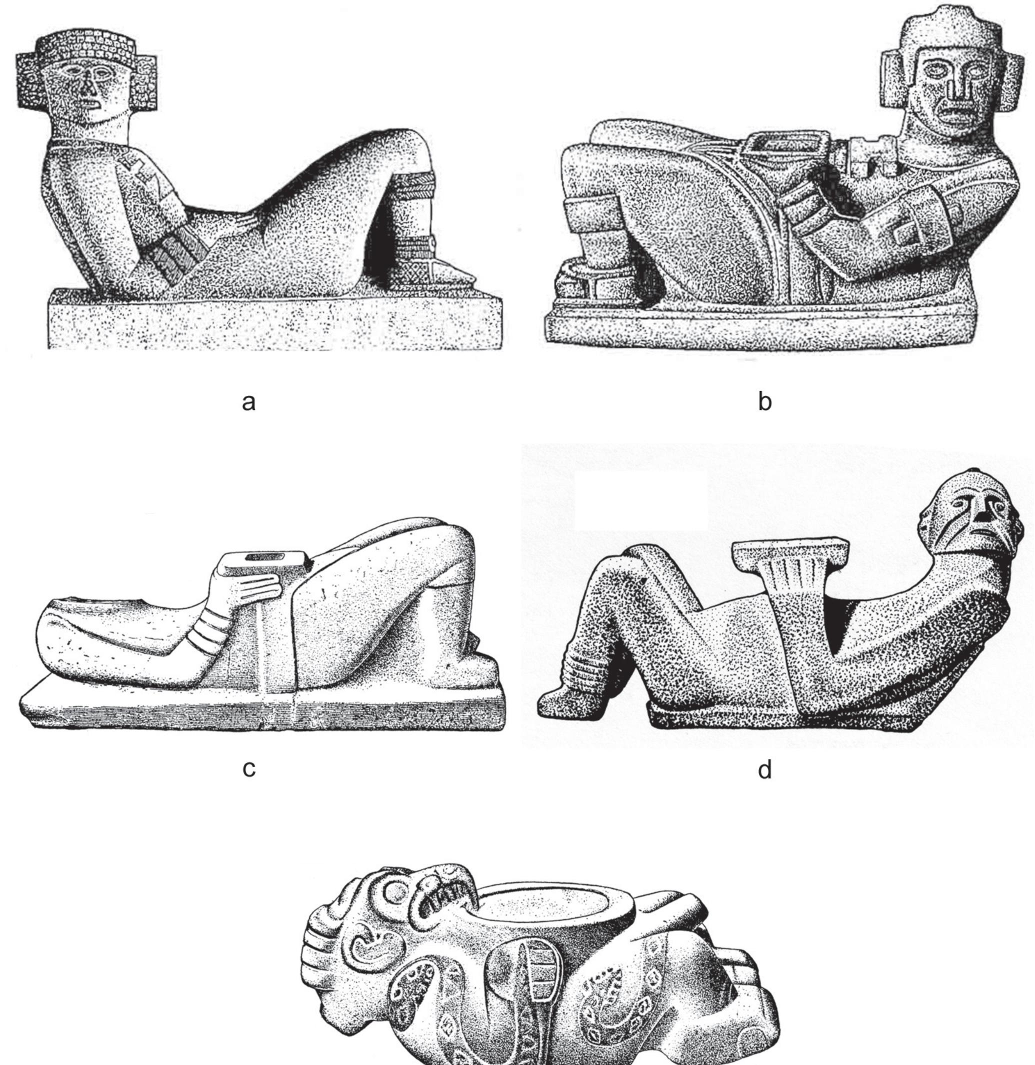


図3　メソアメリカのチャクモール

a. チチェン・イッツァ遺跡、b. トゥーラ遺跡、c. キリグァ遺跡、d. ミチョアカン州、e. コスタリカ共和国
（a, b, c. Gendrop, 1975; d, e. Richardson, 1940）

Xiuhtecuhtlitletl 神を表現していると考えた（Barberena, 1910）。また、中央アメリカのタスマル地区、キリグァ遺跡以外では、メソアメリカにおいて、メキシコ ミチョアカン州、メキシコ市、トラスカラ州、ベラクルス州とユカタン半島にチャクモール石彫はみられる。

ユカタン半島のチチェン・イッツァ遺跡とメキシコ中部のトゥーラ遺跡でみられるトルテカ様

式のチャクモール石彫は腹部に方形で低い容器が表現されている（図 3 a, b；Diehl, 1983; Fuente de la, et al., 1988）。また、キリグァ遺跡のチャクモールも同様の低い方形容器が表現されている（図 3 c；Richardson, 1940）。しかし、タスマル遺跡の23・24号記念物はやや高い円筒形の容器が表現されている（写真 2 a, b）。

ところで、アステカ文化のチャクモール石彫 2 基が報告されている（写真 8 b, c；Gendrop y Díaz B, 1994; Gutiérrez S., 1983）。これらの石彫には、タスマル遺跡の事例のような高い円筒形の台状部分が表現されている。一方、トゥーラ遺跡では、 1 基のチャクモール石彫に、高い円筒形の部分がある。頭部を欠き保存状態は良くないが、腹部に高くなった円筒形の部分がある。デ・ラ・フエンテらは、その石彫様式から間違いなくアステカ文化に属する石彫であると述べている（写真 8 a；Fuente de la, et al., 1988）。

メキシコ西部地方には、チャクモール石彫の事例がある（図 3 d；Williams, 1992）。この地方のチャクモール石彫は、腹部に板状若しくは円筒形部分があり、それを両手で支えている。ウイリアムズは、「概念は北部若しくは北西（メキシコ）にあり、そこからメキシコ中央部に至った。その後、その地で受け入れられたが、形を変えて西部地方に戻った。」（ibid: 45; 拙訳）と考えた。

タスマル遺跡のチャクモール石彫は、トルテカ文化の石彫よりもアステカ文化の石彫に類似性がある（写真 8 b, c）。トルテカ文化のチャクモール石彫は低い方形容器を腹部の上に持ち、アステカ文化では高くて円筒形をした部分が腹部の上に表現されている（図 3 a, b）。また、アステカ文化のチャクモールは上体が起きているが、トルテカ文化のチャクモールは上体が少しだけ起きているが寝ているような姿勢である。タスマルのチャクモール石彫をみると、上体が起きており少し高くなった円筒形部分を腹部に持っている（写真 2 a, b）。そして、メキシコ市で出土したアステカ期初頭とされるチャクモール石彫は、チャルチュアパ遺跡24号記念物の様に、非常に角張っている（Lopez A. y Lopez L., 2001: 73）。以上を考慮すると、タスマル地区出土チャクモール石彫は、トルテカ期からアステカ期に至る過渡期若しくはアステカ期初頭に相当すると考えられる。

一方、チャルチュアパ遺跡25号記念物は、動物形象石彫であるが、その姿勢が非常に興味深い。メソアメリカ南東部太平洋側では、縦位枕付台座付き石彫にみられるように（伊藤 1998c）、主に前足を延ばし後ろ足を曲げた姿勢が石彫に表現された動物では一般的である。しかし、25号記念物は、 4 足を曲げて屈んでいる。チャルチュアパ遺跡では、頭部を欠いているジャガーが後ろ足を曲げ前足を延ばした状態で座った石彫が出土している（Ito, 2000）。メソアメリカでは、 4 足を曲げて屈んだ姿勢のネコ科動物は非常に少ないが、トゥーラ遺跡には 4 足を曲げて屈んだ姿勢の事例が 1 基ある（Fuente de la, et al., 1988, No. 49）。また、メソアメリカ南東部太平洋側では、コツマルワパ地域に 4 足を曲げて屈んで座る動物石彫がみられる。同地域のエル・バウル遺跡には後ろ足を曲げ前足を延ばして座る動物石彫 1 基がある。

トゥーラ遺跡の屈んで座る石彫とチャルチュアパ遺跡の石彫は類似点がある。トゥーラ遺跡の石彫（No. 49）はブロック状の石を角張ったまま整形されている。一方、チャルチュアパ遺跡25号記念物も、バルベレナがソファと呼んでいる（Barberena, 1910）ように、角張っている。

これらの石彫を考慮に入れると、タスマル遺跡においてはトルテカ文化とアステカ文化との交流があったと考えられる。しかし、いつ、どのように、どの経路でチャクモールはタスマルに着いたのであろうか。この疑問については、答えを出すことが難しい。後古典期後期のアステカ文化の上体が起きているチャクモール石彫は、古典期後期〜後古典期前期のチチェン・イッツァ遺跡やトゥーラ遺跡のように低い方形容器ではなく、高い円筒形部分を横たわった人物腹部に持っている。また、トゥーラ遺跡の 1 例（写真 8 a；Fuente de la, et al., 1988, No. 154）とアステカ期初頭の高い円筒形部分を持つチャクモール石彫（Lopez A. y Lopez L., 2001）を考慮すると、タスマル地区のチャクモールはトルテカ期〜アステカ期初頭に相当すると考えられる。以上を考慮すると、トルテカ期からアステカ期に至る過渡期若しくは、アステカ文化が栄えた後古典期後期初頭にヒトの移動があったと考えられる。更に、タスマル遺跡より北に位置するコツマルワパ地域の石彫も考慮すると、タスマルに至る前にコツマルワパ地域を経由した可能性もある。コツマルワパ地域とタスマル地区ではメキシコからの影響がみられる石彫に違いがあることや、タスマル地区以外ではキリグァ遺跡にのみチャクモール石彫があることから、古典期終末期〜後古典期にかけて、メキシコ中央部からの移民が数回あった可能性が考えられる。

5．チャルチュアパとエルサルバドル西部の動物頭部石彫

“様式化されたジャガー”頭部石彫は、パレデスによれば、エルサルバドル西部に50基が分布している（Paredes, 2012）。名古屋大学の調査では 2 基出土したので、合計すると52基になる。これは、先古典期後期、同様の信仰体系が広がり、共有されていたことを示している。

この解釈をもとに、“様式化されたジャガー”頭部石彫の機能に関する以前提示した仮説を以下にまとめる（Ito, 2016; 伊藤 2016, 2017）。

1）地下世界に亡くなった人や壊されたものを送る。

2）方位点に設置し、太陽の活動を崇拝する。

3）生きた目（眼球）は太陽若しくは生命の誕生と関係している。

4）死んだ目（眼窩）は地下世界に関連する。

5）天と地下世界をつなぐ案内人もしくは宇宙の番人としての機能を持っている。

この仮説のもとに、様式化されたジャガー頭部石彫を分析した。2 元性がみられる口と目に注目し、目の分類を口の分類よりも優先して 5 類に分けた。このうちで、生きた目を持つ事例はあるが、両目とも生きた目を持つ事例は無かった。この頭部石彫の分析から、地下世界

に対する信仰体系が共有され、生きた目を持つ頭部石彫は新しい生命若しくは太陽を創り出す機能を持っていたことが考えられる。

“様式化されたジャガー”頭部石彫に対する信仰体系は、エルサルバドル西部に分布している。この石彫の多くは、うつろな目、口から垂れ下がる舌状部といった共通の特徴を持っている。このため、この頭部石彫を介した信仰体系が共有された社会がエルサルバドル西部にあったと考えられる。

一方、チャルチュアパ遺跡では、この時期、高い技術体系と組織化された文字体系を持ち、エルサルバドル西部で政治的にも他より優越していた。そのため、当時の玉座と考えられる四脚付きテーブル状祭壇もこの地域では唯一持っていた（伊藤 2001, 2004a）。このように考えると、チャルチュアパはエルサルバドル西部で中心的な存在であり、先古典期後期のこの地域の首都であった可能性がある。

ところで、チャルチュアパ遺跡22号記念物が、タスマル地区の B1–1建造物の古典期後期の層から出土した（写真 6 a, b）。“様式化されたジャガー”頭部石彫の左側半分の破片で、右を下にして南を向いている状態で出土した。先古典期後期の仮説にある機能を持っておらず、他の役割を担っていたとも考えられる。そして、最後に、埋められた。

6．香炉

香炉形石彫は古典期前期の14b 埋葬から出土している。箱状で、 4 面に浮彫りが施されている。上面にはくぼみがあり、そこには灰と炭化物が残っていたために香炉とボッグスは報告している。浮彫りには、腕と足を曲げて四つん這いになった人物が表現されている。後部には同心円状の円が 2 つそしてその上に楕円が 3 つ表現されている。

メソアメリカ南東部太平洋側では、グァテマラの海岸部にあるコツマルワパ地域でも香炉は出土している。しかし、タスマル遺跡の香炉とは類似性がみられない。この石彫は、古典期前期にタスマル遺跡で独自に作られた可能性が高い。

7．Bench-Figure 型石彫

人物部分と人物が座るベンチ部分からなる石彫である。この形の石彫は主にメソアメリカ南東部太平洋側でみられる。分布は、メキシコ湾岸、ゲレロ、ホンジュラスにも広がっている（伊藤 1998b）。タスマル遺跡では、破片が球戯場（B1–4建造物）の表土から出土している。ベンチ部分の 2 脚、そして胴部と左手の一部のみが残っていた。痕跡からみると、ベンチ部分は 4 脚であった可能性が高い。そして、手はベンチに直接置かれていたようである。同様な姿勢は、グァテマラ高地とエルサルバドルにもみられる。一方、最も一般的なベンチの脚は

2脚である。また、ベンチの両端はメソアメリカ南東部太平洋側では2段になっている事例が多いが、タスマルの事例は段を持っていないため、他の当該地域の事例とは異なる。

この形の石彫にみられる、四脚付きベンチはメソアメリカ南東部太平洋側で先古典期後期に玉座とされている四脚付きテーブル状祭壇と似ている（伊藤 2001, 2004a）。以上のことを考慮に入れると、この石彫破片に表現されるベンチは権力の象徴であった。また、ベンチ上の人物の多くは髪が表現されていない。ただ縮毛状の髪の表現が数例みられる。一方、エルサルバドルとホンジュラスでは、出土状況など詳細不明であるがヘルメット状の頭飾りが確認されている。

8．エルサルバドルにおけるユーゴ形石彫と儀礼用石斧

エルサルバドルで最初に記録されたのは、1878年である。アワチャパン県アパネカにおいて、ハーベルは墓を発掘し、素面のユーゴ形石彫2点、儀礼用石斧2点他を得た（Habel, 1878; Shook and Marquis, 1996, Y20, 21, M27, U85）。

一方、シュークらは、儀礼用石斧453点ユーゴ形石彫188点パルマ形石彫23点を集成し出版した（Shook and Marquis, 1996）。その集成によれば、グァテマラでは様々な儀礼用石斧とユーゴ形石彫がみつかっている。しかし、パルマ形石彫はほとんどない。エルサルバドルにおいては、ユーゴ形石彫28点儀礼用石斧45点パルマ形石彫19点がある。チャルチュアパ遺跡ではユーゴ形石彫2点儀礼用石斧7点パルマ形石彫6点が出土している。また、エルサルバドル東部にある遺跡ケレパでは儀礼用石斧2点ユーゴ形石彫2点パルマ形石彫3点が出土している。

ユーゴ形石彫に注目すると、グァテマラ146点メキシコ南東部15点ホンジュラス10点ニカラグア1点の事例がある。儀礼用石斧は、グァテマラ385点メキシコ南東部20点ホンジュラスで3点出土している。パルマ形石彫はグァテマラ2点メキシコ南東部1点出土している。ユーゴ形石彫、儀礼用石斧、パルマ形石彫の大半はグァテマラで出土しており、エルサルバドルは2番目に多いといえる。しかし、パルマ形石彫の数量に関しては、グァテマラよりもエルサルバドルの方が多い。グァテマラのパルマ形石彫は小さく、メキシコ湾岸の石彫と比較すると、エルサルバドルの石彫の方がメキシコ湾岸のものに近い。

ところで、タスマル遺跡ではユーゴ形石彫2点、儀礼用石斧6点、パルマ形石彫1点が出土している。儀礼用石斧では、2点に骸骨、1点にヘビ、1点に人物、1点に猛禽類が浮き彫りされている。もう1点あるが表現されているものは不明である。赤鉄鉱製赤色顔料で覆われた21号埋葬では、素面のユーゴ形石彫1点猛禽類が浮彫りされた儀礼用石斧1点が出土している（Shook and Marquis, 1996, Y2, BP5）。2号墓（22c埋葬）では、ユーゴ形石彫1点儀礼用石斧3点が出土している。儀礼用石斧2点には、ガイコツとヘビが浮彫りされている。もう1点（U42）は、腐食した黄鉄鉱の黄色の粉末が付いており、鼻の特徴からシチメンチョ

ウの可能性がある動物が浮き彫りされている（Shook and Marquis, 1996, Y3, S3, SK8, U42）。

エルサルバドルでは他の遺跡でも、ユーゴ形石彫、儀礼用石斧、パルマ形石彫が出土している。この 3 種の石彫の組み合わせは、メキシコ湾岸地方では一般的とされる。ケレパ遺跡では、この 3 種の石彫が一緒に出土している（Andrews, 1976）。29号建造物南東角の24号埋納からユーゴ形石彫 3 点パルマ形石彫 2 点儀礼用石斧 1 点が出土した。サン・アンドレス遺跡では、ジャガー若しくはウサギとされる浮彫りが施された儀礼用石斧 1 点がユーゴ形石彫近くから出土した（Boggs, 1943; Shook and Marquis, 1996, Y33, J46）。また、1C 建造物内部から、古典期後期とされる儀礼用石斧の破片が出土した（Shook and Marquis, 1996, U31）。シワタン遺跡では、素面のユーゴ形石彫 1 点とガイコツが浮彫りされた儀礼用石斧 1 点が一緒に出土した（Shook and Marquis, 1996, Y30, SK34）。

タスマル地区のユーゴ形石彫と儀礼用石斧は古典期後期の可能性がある。また、儀礼用石斧とユーゴ形石彫は、大半がグァテマラで出土している。しかし、シュークらはエルサルバドルに特有な儀礼用石斧があると述べている（Shook and Marquis, 1996）。一方、グァテマラで出土した小型のもの 1 点を除くとすべてのパルマ形石彫はエルサルバドルで出土し、チャルチュアパ遺跡に集中している。このために、グァテマラの小型パルマ形石彫はエルサルバドルからの搬入品である可能性が考えられる。一方、タスマル地区の小型のパルマ形石彫 1 点は、メキシコ湾岸地方でみられないため、エルサルバドルが起源である可能性が高い。以上を考慮に入れると、エルサルバドルでは、他の地域の石彫の概念を取り入れ、新たな石彫を作り出した可能性がある。特に、小型のパルマ形石彫は、チャルチュアパ遺跡において独自に作り出された小型石彫である可能性が高いと考えられる。

９．ほかの石彫

ボッグスが発掘した石彫に、内向きの渦巻 2 つが組み合わさった文様を浮彫りした石彫がある（写真 5 b）。この文様と同様な連結渦巻文はメソアメリカではみられないが、メキシコ中央部にある春の神であるショチピリの石彫には、下の祭壇部分に内向きに巻く角張った連結渦巻文が表現されている（Matos M., 1989）。この渦巻文は、メキシコ中央部と関連があるかもしれない。

キノコ石はメソアメリカ南東部太平洋側では、一般的な石彫である（Ohi y Torres, 1994）。また、オアハカ地方やメキシコ湾岸地方でもキノコ石はみられる。

29号記念物及び軽石製品は建築装飾である可能性が高い。また、このなかにはメキシコ中央部でみられる屋根飾りに似ている石彫もある（写真 5 c, d, e, f；Anderson, 1978, fig. 14b）。

他の石彫破片のなかには、記念碑的な石彫の破片である可能性がある（写真 4 d, e, f, g）。最も大きな破片はメソアメリカ南東部太平洋側でみられるシルエット石彫の一部である可能性が

考えられる（写真 4 g；伊藤 2002)。

小型石彫の可能性がある 2 点（写真 4 b, c）は、メソアメリカにおいて類似の例がない。このため、その起源と年代については判断できない。

10. タスマル遺跡における石彫が来た道

記念碑的な石彫から考えると、“様式化されたジャガー”頭部石彫（写真 3 a）は、タスマル地区を含むチャルチュアパ遺跡内で作られた可能性があり、他のメソアメリカの地方から来た可能性は少ないと考える。27号記念物は人物頭部と下の軸部からなる石彫で、頭部の特徴は太鼓腹石彫の頭部に似ている（写真 3 b)。また、 2 つに分かれる眉間の隆起部分はオルメカ文化の巨石人頭像などにみられる眉間の隆起部分に似ている。このことを考慮すると、巨石人頭像が分布しているメキシコ湾岸若しくは、大型人頭像が分布しているメソアメリカ南東部太平洋側からの影響がみられる。しかし、類似する事例は無いため、チャルチュアパ遺跡のある地域で創り出された可能性が高い。

タスマル遺跡の人物形象石碑（21号記念物）はオアハカ海岸部、ゲレロ州そしてトゥーラ遺跡と関連がみられる。ゲレロ州太平洋岸部では、幾つかの遺跡で石彫や彫刻された石碑がみられる（Rosenthal, 1963)。また、ゲレロ州では、バルサス川沿いでも石碑がみられる（Reyna Robles, 2002)。オアハカ地方海岸部では、石碑数基にタスマル遺跡の石碑との類似性がみられる（Navarrete, 1979)。ホリンは、オアハカ海岸部では、オアハカ盆地やメキシコ湾岸の美術要素もみられるが、石彫を観察すると、主にモンテ・アルバンやテオティワカンとの文化的交流がみられる。グァテマラの海岸部に沿って、モンテ・アルバンやテオティワカンと共有する文様などもみられる。ホリンは、リオ・グランデとモンテ・アルバンは文化的な交流があり、リオ・グランデの石碑の起源はモンテ・アルバンにあると考えている（Jorrín, 1974)。このように考えると、トゥーラの人物形象石碑がタスマルの人物形象石碑に影響を与えた可能性がある。また、その影響がトゥーラ遺跡からタスマル遺跡に至る道は、トゥーラから始まり、バルサス川を通ってゲレロ州やオアハカ州の海岸部に至り、そこで在地の石彫形式を受容し、トルテカ文化の特有な要素を石碑に付け加えた。その後、テワンテペク地峡、そしてチアパス州を通り、そしてエルサルバドルに入り海岸部のアカフトラ周辺から内陸に入りタスマル遺跡に着いた。最終的に、在地の石彫伝統と融合させて、特有の人物形象石碑を創った可能性がある。

一方、チャクモールをみると、トゥーラからタスマルに至る他の経路も考えられる。キリグァ遺跡以外に、ユカタン半島とメキシコ湾岸でチャクモールが出土していることを考慮すると、メキシコ湾岸を通り、カリブ海に至り、そして、モタグァ川に沿ってキリグァに到着する。そこから、山を越えて、タスマルに至る。この場合、当時交易されたコパドール土器からも考えられるように、エルサルバドルとコパンは関係が深かった。このことを考慮すると、コ

パン遺跡を経由してエルサルバドルに来たことも考えられるが、コパン遺跡には類似の石彫がないために現時点ではコパン経由ということは考えられない。ところで、タスマルのチャクモールはトルテカ文化よりもアステカ文化との関連が強かった。このことは、メキシコ チアパス州に位置するソコヌスコ地域を経由するもう一つの経路も考えられる。ソコヌスコには当時アステカ王国の拠点があった。しかし、アステカ様式のチャクモールは、メソアメリカ南東部太平洋側にはないために、現時点でこの経路を通ってやってきたということは難しい。しかし、他の可能性も考えられる。つまり、チャクモールという石彫の概念のみが戦略的商人である“ポチテカ”のような旅人を通して、到着したということである。しかし、この仮説も、石彫を作る技術なしには考えられないために、同じものがつくれたのかという疑問がある。一方、屈んだ動物形象石彫（25号記念物）と連結渦巻文を持つ石彫は、チャクモール石彫（23、24号記念物）や人物形象石碑（21号記念物）がやってきた道を経由してタスマルに来た可能性が考えられる。

また、小型石彫であるユーゴ・儀礼用石斧・パルマ形石彫の古典期後期における分布をみていると、記念碑的な石彫とは異なる経路が考えられる。メキシコ湾岸からテワンテペック地峡を横切り、グァテマラの海岸部を通過して、最後にタスマル遺跡に到着した可能性がある。一方、軽石製品（建築装飾）や29号記念物は、メキシコ中央部との関係を暗示しているが、どのような経路を取ってタスマルに来たのかは判断できない。また、他の小型石彫であるキノコ石については、先古典期後期に他のメソアメリカ南東部太平洋側の遺跡から来た可能性もあるが、エルサルバドル西部のどこかで作られた可能性もあると考えている。Bench-Figure 型石彫については、先古典期後期にタスマル地区を含むチャルチュアパ遺跡にやってきた可能性があるが、この破片 1 点のみでは判断できない。

11. おわりに

チャルチュアパ遺跡においては、先古典期前期から文化交流の痕跡が土器にもみられる（Sharer, ed., 1978）。エル・カルメン遺跡において、先古典期前期の土器が出土している（Arroyo, 1990）ことからも、この時期に太平洋岸からチャルチュアパ遺跡に土器の影響が及んだと考えられる。先古典期中期には、タスマル地区の北東にあるラス・ビクトリアス地区にオルメカ文化の影響が及んだ。この経路もグァテマラ太平洋の太平洋岸を通って太平洋側からやってきた可能性がある（Ito, 2009）。この後、先古典期後期には、土器、石彫などにみられるように、カミナルフユはじめとするグァテマラからの影響が及んだ（Sharer, ed., 1978; 伊藤 1998b, c, 2001, 2004a, b, 2014; Ito, 2016）。この時期に、Bench-Figure 型石彫や27号記念物にその影響はみられる（Ito, ed., 2009）。27号記念物は、メソアメリカ南東部太平洋側にみられる太鼓腹の石彫の特徴を持っている（伊藤 2018）。この地域は太鼓腹石彫が多く出土してお

り、タパルシュクッ遺跡の事例は頭部のみ太鼓腹の石彫の特徴を持ち胴部の代わりに軸部を持っていると考える研究者もいる（Escamilla, 2002; Guernsey, 2012）。以上を考慮すると、チャルチュアパ遺跡で新しく作り出された石彫の可能性もある。確かに、27号記念物は、頭部は太鼓腹石彫が持っている特徴を持ち、その下に棒状の軸部がある。このように考えると、先古典期後期のタテ杭付石彫とモンテ・アルト様式の太鼓腹石彫の融合といえるかもしれない。

古典期前期においては、14b 埋葬で出土した香炉以外は石彫がない。これは、カミナルフユやテオティワカンにおいて石彫の多様性がみられないことと関係しているかもしれない。カミナルフユ遺跡では、横位ホゾ付き石彫が球戯場と関連して出土している（伊藤 1999）。しかし、タスマル地区ではこの種の石彫は出土していない。唯一、サン・アンドレス遺跡で小型の横位ホゾ付き石彫が出土している。タスマル遺跡出土石製香炉は、テオティワカンの影響を受けているとされるが、その経路については石彫のみでは判断できない。

古典期後期、球技に関係するといわれる 3 種の石彫（ユーゴ形石彫・儀礼用石斧・パルマ形石彫）が出土している。タスマル地区でも、パルマ形石彫 1 点はメキシコ湾岸のものと比較すると小さいが、この 3 種類とも出土事例がある。また、この小型のパルマ形石彫は、エルサルバドルで新たに作り出された可能性がある。このため、エルサルバドルでは、メキシコ湾岸における球戯に関連する石彫伝統を導入したが、タスマル地区の状況に合わせて改良した可能性がある。また、古典期終末期になると、コパン遺跡（マヤ文化）やトゥーラ遺跡（トルテカ文化）の石彫伝統を取り入れて、“タスマルの乙女”とされる人物形象石碑（21号記念物）をタスマル地区の伝統に融合させて新たに作り出した。つまり、ユカタン半島のチチェン・イッツァ遺跡におけるトルテカ - マヤ文化のように、マヤ低地の文化とトルテカ文化を融合させた石彫と考えられる。

後古典期、チャクモール石彫を考慮すると、メキシコ中央部とエルサルバドルとの文化交流が考えられる。トルテカ文化やアステカ文化とタスマル地区との関係を総合的に分析する必要はあるが、タスマル地区のチャクモールはアステカ様式の石彫に似ている。また、他のメソアメリカ南東部太平洋側では、アステカ様式のチャクモールはみられない。しかし、ソコヌスコ地域にアステカ王国の拠点があったことを考慮すると、この地を経由してチャクモール石彫の概念が到来した可能性が考えられる。実際、メキシコ西部などで作られた銅鈴がソコヌスコを通って、ラガルテロ、タフムルコ、チャルチュアパなどの遺跡にもたらされた可能性は否定できない（伊藤 1998a; Dutton y Hobbs, 1943; Rivero, et al., 2014）。

このように、タスマル地区では長い時の流れのなかで、様々な文化交流があったと考えられる。この文化交流に伴って、ヒトの移動もあった。そして、そうした文化の移動はタスマル地区において、他所の文化を単に導入するのではなく、他所の文化を解釈し、新たなものを作り出したことも確実である。

謝辞：この調査の経費は、2017年度科学研究費補助金（挑戦的研究（萌芽）「DNA を文化人類学的視点から読み解く研究」17K18525）の一部が使われました。

参考文献

Anderson, Dana

1978 "Monuments." In ***Prehistory of Chalchuapa, El Salvador*** I, edited by Robert J. Sharer, pp. 155–180.

Arroyo, Bárbara

1990 "Agricultores incipientes en El Salvador y otras regiones de Mesoamérica." En ***Primer Foro de Arqueología de Chiapas***, editado por el gobierno del estado de Chiapas, pp. 87–103.

Barberena, Santiago Ignacio

1910 ***Monografías Departamentales: Santa Ana***. Dirección General de Estadística y Censos, San Salvador.

Andrews, Edward Wyllys

1976 ***The Archaeology of Quelepa, El Salvador***. *Publication* 42, Middle American Research Institute, the Tulane University of Louisiana, New Orleans.

Baudez, Claude

1970 ***América Central***. Editorial Juventud, S. A., Barcelona.

Boggs, Stanley

1943 "Notas sobre las excavaciones en la Hacienda "San Andrés"." *Tzunpame* 3 (1): 104–126.

1945 "Informe sobre la tercera temporada de excavaciones en las ruinas de "Tazumal"." *Tzunpame* 5: 33–45.

Brockington, Donald L., María Jorrín and J. Robert Long

1974 ***The Oaxaca Coast Project: Report*** I. *Publications in Anthropology* 8, Vanderbilt University Nashville.

Brockington, Donald L. and J. Robert Long

1974 ***The Oaxaca Coast Project: Report*** II. *Publications in Anthropology* 9, Vanderbilt University Nashville.

Diehl, Richard A.

1983 ***Tula: The Toltec Capital of Ancient Mexico***. Thames & Hudson, London.

Dutton, Bertha P. and Hulda R. Hobbs

1943 ***Excavations at Tajumulco, Guatemala***. *Monographs of the School of American Research* 9 (1), School of American Research and Museum of New Mexico, University of New Mexico Press, Albuquerque.

Escamilla, Marlon

2002 ***Informe Preliminar del Sitio Arqueológico Tapalshucut, Departamento de Sonsonate***. Museo Nacional de Antropología "Dr. David J. Guzman", San Salvador.

Fuente de la, Beatriz, Silvia Trejo y Nelly Gutiérrez Solana

1988 ***Escultura en Piedra de Tula***. *Cuadernos de Historia del Arte* 50, Instituto de Investigaciones Estéticas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Gendrop, Paul y Iñaki Díaz Balerdi

1994 ***Escultura Azteca: Una Aproximación a su Estética***. Trillas, México, D.F.

Girard, Rafael

1949 ***Los Chortís ante el Problema Maya: Historia de las Culturas Indígenas de América, desde su Origen hasta Hoy*** 5. Antigua Librería Robredo, México, D.F.

Gonzalez Sol, Rafael

1951 "Las bellas artes y las bellas letras en Centro América durante el período prealvaradeano." *Anales Museo Nacional "David J. Guzmán"* II (5): 48–67.

Guernsey, Julia

2012 ***Sculpture and Social Dynamics in Preclassic Mesoamerica***. Cambridge University Press, Cambridge.

Gutiérrez S., Nelly

1983 ***Objetos Ceremoniales en Piedra de la Cultura Mexica***. Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Habel, Simeon

1878 ***The Sculptures of Santa Lucia Cosumalwhuapa in Guatemala***. *Smithsonian Contributions to Knowledge* 269, Washington, D.C.

Henning, Paul

1918 "La arqueología mexicana como norma para el estudio de las antigüedades Nahoa-Pipiles." *Servicio de Informaciones Alemanas en México* 4: 49–76.

Ito, Nobuyuki

2000 "Parte I, Capítulo 9, Las esculturas en Casa Blanca, Chalchuapa." En ***Chalchuapa, Memoria Final de las Investigaciones Interdisciplinarias de El Salvador***, editado por K. Ohi, pp. 194–196.

2009 "Desde la frontera mesoamericana." En ***Olmeca: Balance y perspectivas***, editado por M. T. Uriarte y R. B. González L., pp. 583–603.

2016 "Chalchuapa como capital regional del occidente de El Salvador durante el Preclásico Tardío." En ***XXIX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala***, editado por B. Arroyo, L. M. Salinas y G. Ajú Á., pp. 33–44.

伊藤伸幸

1998a「タフムルコ遺跡出土の石彫と鉛釉土器」『楢崎彰一先生古稀記念論文集』真陽社、pp. 488–496.

1998b「Bench-Figure と呼ばれる小石彫について」『貞末堯司先生古希記念論集：文明の考古学』海鳥社、pp. 1–17.

1998c「マヤ南部地域で"PEDESTAL"と呼ばれる石彫について」『名古屋大学文学部研究論集』44 (131)：47–78.

1999 「マヤ南部地域でみられる横方向にホゾが付いた石彫」『名古屋大学文学部研究論集』45 (134)：55–94.

2001 「南メソアメリカ太平洋側斜面の四脚付テーブル状台座形石彫」『名古屋大学文学部研究論集』47 (140)：7–26.

2002 「南メソアメリカ太平洋側斜面における片面（シルエット）浮彫りについて」『名古屋大学文学部研究論集』48 (143)：41–66.

2004a「南メソアメリカ出土石彫に表現される四脚付テーブル状台座の考古学的分析─古代メソアメリカ王権の起源に関わる考古学的研究の一つとして─」『古代文化』56–1：27–44.

2004b「南メソアメリカ海岸地帯出土石碑の形」『名古屋大学文学部研究論集』50 (149)：21–56.

2011 『中米の初期文明オルメカ』同成社、東京.

2014 「メソアメリカ南東部太平洋側の動物形象祭壇についての一考察」『名古屋大学文学部研究論集』60 (179)：69–101.

2016 「"様式化したジャガー頭部"石彫について (1)」『名古屋大学文学部研究論集』62 (185)：101–123.

2017 「"様式化したジャガー頭部"石彫について (2) ─メソアメリカ南東部太平洋側における意味を考える─」『名古屋大学文学部研究論集』63 (188)：47–72.

2018 「エルサルドル共和国における太鼓腹の石彫」『名古屋大学人文学研究論集』1 ：413–432.

Ito, Nobuyuki (ed.)

2009 ***Informe Final de las Investigaciones Arqueológicas en Tazumal, 2004–2008***. Secretaría de Cultura, San Salvador.

2014 ***Informe Final del Proyecto "Investigación Arqueológica a través de Sondeo Geofísico en el Área de El Trapiche, Chalchuapa" (2012–2014)***. Dirección de Arqueología de la Secretaria de Cultura de la Presidencia, Proyecto Arqueológico de El Salvador, San Salvador.

Jorrín, María

1974 "Stone Monuments." In ***The Oaxaca Coast Project: Report I***, edited by D. L. Brockington, M. Jorrín and J. R. Long, pp. 25–81.

Lardé, Jorge

1926 "Cronología arqueológica de El Salvador." *Revista de Etnología, Arqueología y Lingüística* 1 (3–4): 153–162.

1926 "Región arqueológica de Chalchuapa: Tazumal-Pampe-Casa Blanca-El Trapiche-Cuzcachapa." *Revista de Etnología, Arqueología y Lingüística* 1 (3–4): 163–173.

Lardé y Larín, Jorge

1959 "La estela de Tazumal." *Anales Museo Nacional "David J. Guzmán"* II (7): 31–45.

Longyear, John A.

1966 "Archaeological Survey of El Salvador." In ***Handbook of Middle American Indians*** 4, edited by Gordon F. Eckholm and Gordon R. Willey, pp. 132–156.

Lopez Austin, Alfredo y Leonardo Lopez Lujan

2001 "Los mexicas y el Chacmool." *Arqueología Mexicana* 49: 68–73.

Matos Moctezuma, Eduardo

1989 ***Los Aztecas***. Corpus precolombino, Lunwerg Editores, S. A., Barcelona.

Nance, Charles Roger, Stephen L Whittington and Barbara Elizabeth Jones-Borg

2003 ***Archaeology and Ethnohistory of Iximché***. University Press of Florida, Gainesville.

Navarrete, Carlos

1979 ***Las Esculturas de Chaculá***. *Serie Antropológica* 31, Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.

Ohi, Kuniaki (ed.)

2000 ***Chalchuapa***. Universidad de Estudios Extranjeros de Kioto, Kioto.

Ohi, Kuniaki y Miguel Torres (ed.)

1994 ***Piedras-Hongo***. Museo de Tabaco y Sal, Tokio.

Paredes, Federico

2012 ***Local Symbols and Regional Dynamics: The Jaguar Head Core Zone in Southeastern Mesoamerica during the Late Preclassic***. Dissertation for the degree of doctor of philosophy in Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Parsons, Lee A.

1986 ***The Origins of Maya Art: Monumental Stone Sculpture of Kaminaljuyu, Guatemala, and the Southern Pacific Coast***. *Studies in Pre-Columbian Art & Archaeology* 28, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington.

Peccorini, Atilio

1913 "Algunos datos sobre arqueología de la República del Salvador." *Journal de la Société des Américanistes* 10 (1): 173–180.

Reyna Robles, Rosa Maria

2002 "Esculturas, lapidas de la región del Balsas." En ***El Pasado Arqueológico de Guerrero***, editado por C. Niederberger y R. Ma. Reyna Robles, pp. 359–386.

Rivero T., Sonia E., G. P. Guerrero, I. J. Cosme, P. T. López, J. L. Rusvalcaba S., J. Arenas, A. Lemoine, J. Contreras V., P. R. Portilla, D. Tenorio, y G. Villa

2014 "Objetos de metal localizados en la Pirámide núm. 2 de Lagartero, Chiapas." *Arqueología* 49: 134–146.

Rosenthal, Jane Powell

1963 "Exploring Ancient Guerrero." *The Brooklyn Museum Annual* II・III: 7–17.

Sharer, Robert J.

1978 ***Prehistory of Chalchuapa, El Salvador* I–III**. Univ. of Pennsylvania Press, Philadelphia.

Shook, Edwin M. and Elayne Marquis

1996 ***Secrets in Stone: Yokes, Hachas and Palmas from Southern Mesoamerica***. *Memoirs of the American Philosophical Society* 217, American Philosophical Society, Philadelphia.

Schuler, Rodlfo

1925 “Xipe-totec, el dios rojo en Centro América.” *Revista de Etnología, Arqueología y Lingüística* 1 y 2: 77−108.

Spinden, Herbert J.

1915 “Notes on the Archeology of Salvador.” *American Anthropologist* 17 (3): 446–487.

Richardson, Francis B.

1940 “Non-Maya Monumental Sculpture of Central America.” In ***The Maya and their Neighbors***, edited by C. L. Hay, R. L. Linton, S. K. Lothrop, H. L. Shapiro, and G. C. Valliant, pp. 395–416.

Williams, Eduardo

1992 ***Las Piedras Sagradas: Escultura Prehispánica del Occidente de México***. El Colegio de Michoacan, Zamora.

キーワード：タスマル、石彫、ヒトの移動、古典期、後古典期

写真１　チャルチュアパ遺跡21号記念物

a

b

c

写真２　チャルチュアパ遺跡23, 24, 25記念物

チャクモール：a. 23号記念物、b. 24号記念物（Sharer, ed., 1978）
動物形象石彫：c. 25号記念物

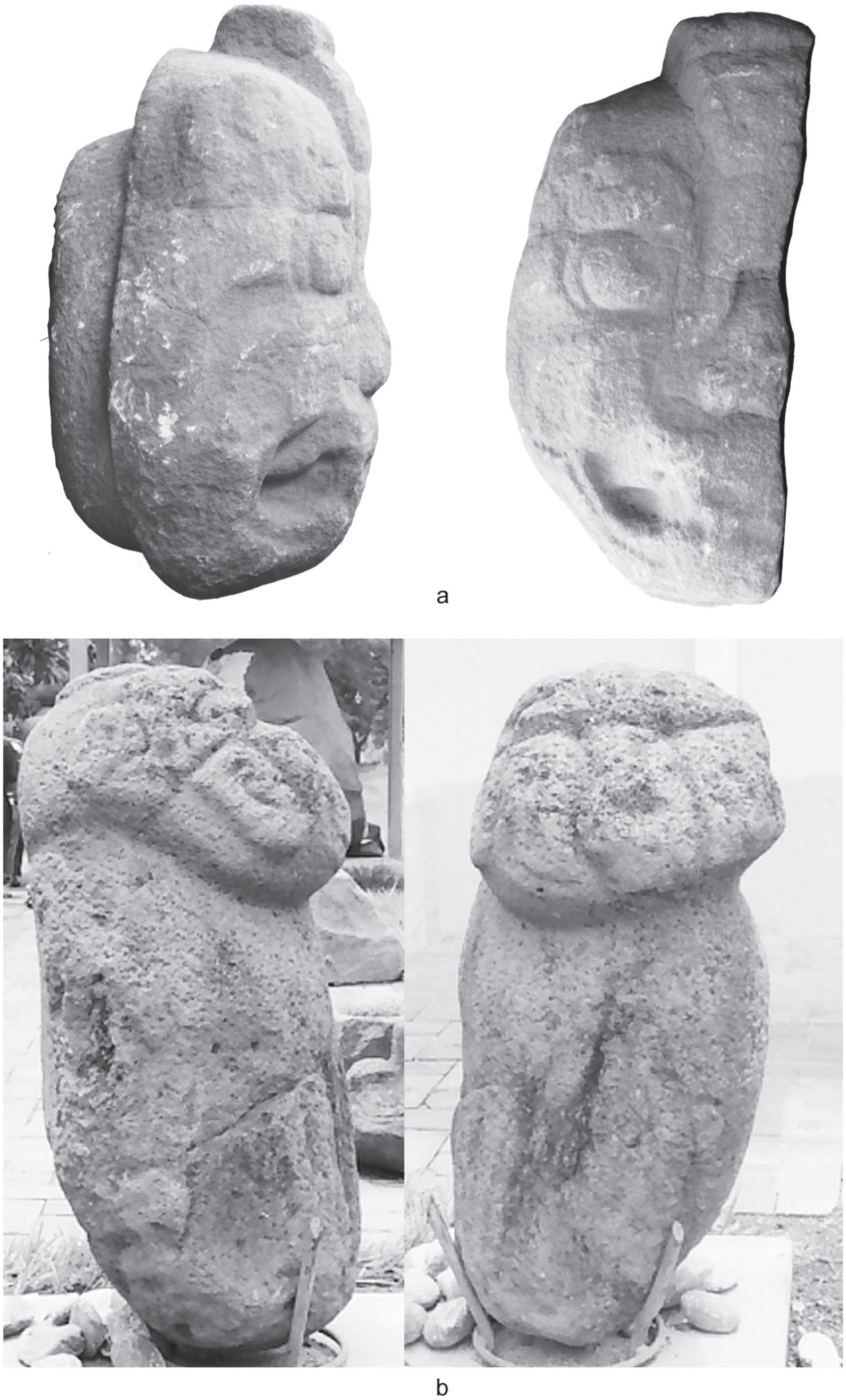
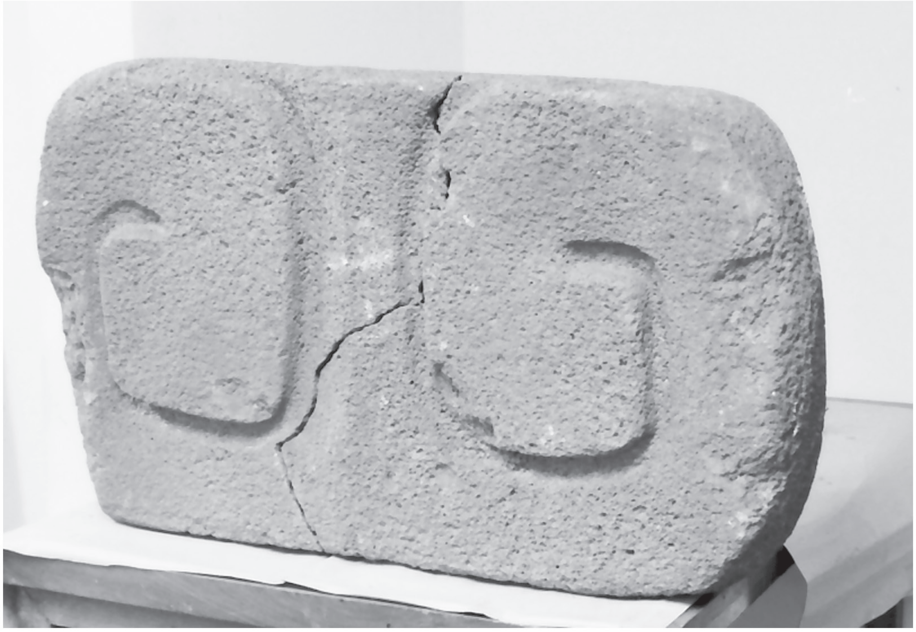


写真３　チャルチュアパ遺跡22, 27号記念物

a. 22号記念物、b. 27号記念物

写真４　2004–2009年及び2010–2014年調査で出土した石彫

a



b

c

d

e

f

写真 5　ボッグスが発掘した石彫と建築装飾用石彫

（f. Gift of the Carnegie Institution of Washington, 1958 © President and Fellows of Harvard College, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, PM# 58-34-20/39809）

a

b

c

d

写真６ ボッグスによる発掘調査

a, b. 22号記念物、c. 幾何学文がある石彫、d. 14b 埋葬の香炉
（a, b, d. ADAM: Archivo del Departamento de Arqueología de Ministerio de Cultura; c. Gift of the Carnegie Institution of Washington, 1958 © President and Fellows of Harvard College, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, PM# 58-34-20/39661）

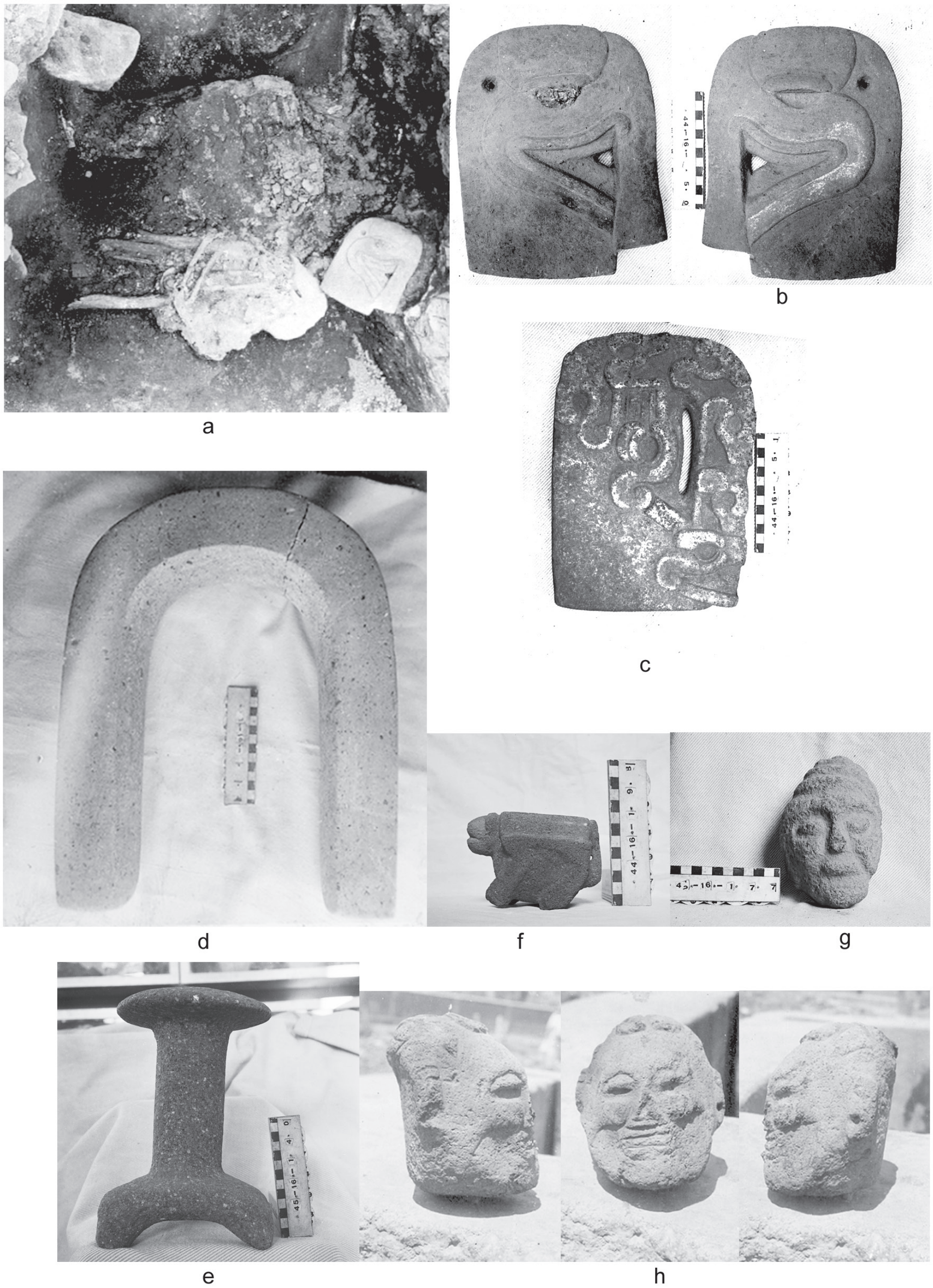


写真７　ボッグスの発掘した小型石彫

a. ２号墓の発掘、b, c. 儀礼用石斧、d. 21号埋葬のユーゴ形石彫、e. ８号墓のキノコ石、f, g. 人物頭部（a, d, h. ADAM; b, c, e, f, g. Gift of the Carnegie Institution of Washington, 1958 © President and Fellows of Harvard College, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, PM# 58-34-20/42385; 58-34-20/42385.1; 58-34-20/42386; 58-34-20/39812; 58-34-20/42833.1; 58-34-20/47616）

a

b

c

写真８　メソアメリカのチャクモール

a. トゥーラ遺跡、b, c. テノティトラン遺跡（a. Fuente de la, et al., 1980）

Abstract

Las esculturas de Tazumal: Un testigo de migración hacia Chalchuapa

Nobuyuki Ito

En Chalchuapa, se han encontrado esculturas elaboradas de varios “estilos” culturales y regionales ligadas a secuencias cronológicas como el Olmeca, Maya, y Tolteca entre otros.

Durante el periodo de Preclásico Medio, posiblemente llegaron a Chalchuapa, los olmecas. Tiempo después, durante el periodo de Preclásico Tardío, llegó a Tazumal, la cultura del esculpido original propio de Chalchuapa.

Durante el periodo Clásico Temprano, solo existe una escultura con características del estilo de Teotihuacán. Por otra parte, durante el periodo Clásico Tardío en Chalchuapa se introdujo una tradición ajena propia del Golfo de México, modificándolo a la manera propia de Tazumal. Asimismo, acercándose a la etapa terminal del periodo Clásico, se ha observado otra mezcla escultórica entre los estilos escultóricos Maya y Tolteca. Sin embargo, durante el periodo Posclásico puede observarse otro intercambio cultural entre el Centro de México y El Salvador a través de la escultura llamada *Chac Mool*.

Así es como en Tazumal, se puede reconocer el intercambio cultural durante un largo periodo de tiempo. Con este intercambio cultural, se puede identificar que hubo una o varias migraciones desde México hacia Chalchuapa.

Keywords: Tazumal, Escultura, Migración, Clásico, Posclásico